



Title	陪席者のいる心理臨床面接場面の特徴と初学者訓練における陪席体験の意味
Author(s)	渡邊, 誠; Watanabe, Makoto
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 7, 63-68
Issue Date	2025-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.7.63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94636
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_2434-7639_7_63-68.pdf



陪席者のいる心理臨床面接場面の特徴と 初学者訓練における陪席体験の意味

渡邊 誠*

Characteristics of Clinical Psychology Interview Situations with Attendee and the
Meaning of Attending Experience for Beginner Students of Clinical Psychology

Makoto WATANABE

要旨

臨床心理学的支援の初学者に対して行われる心理臨床面接への陪席体験の持つ意味を、集団精神療法への参加の場合との比較対照を含めて検討した。陪席者の存在がクライアント、心理臨床家の双方に与える正負両方の影響についても考察した。陪席による学習の特徴は、クライアントの利益を最大にすることを目標とする心理臨床の場における刺激入力の総体（「雰囲気的なもの」と知覚される）が蓄積されてゆくことによる参照枠の形成であり、これは陪席による学習の暗在的側面である。

キーワード：関与、観察、参照枠、暗在的側面

Key words : participation, observation, frame of reference, implicit aspect

1. はじめに

心理臨床の初学者に対する訓練には、実際のケース担当、ケース・カンファレンス、熟練の心理臨床家の心理面接録画視聴、文献学習と並んで、自分より上級の心理臨床家のケース面接への陪席が行われている。心理臨床の現場の状況を考えると、陪席はおそらく大学院の訓練段階以外では、あまり機会が無いもののように思われる。陪席面接とはどのような場であり、心理臨床の初学者は、陪席で何を学ぶのか。

初学者が上級の臨床家の臨床実践を直接観察する機会は、陪席の他に、集団精神療法に直接参加するという場合があるだろう。個別面接陪席と集団精神療法参加、それぞれの体験内容を比較検討する形で、陪席面接という場の特徴とそこで学習されることについて検討したい。

* 北海道大学大学院教育学研究院准教授

なお、本論において関与、観察、介入という用語は、以下のような意味で用いるものとする。

関与：対人的な場の一員であること

観察：対人的な場において刺激入力を受け、その一部を認識すること

介入：言語的、非言語的方法により、対人の場の他の成員に主に意図的に働きかけること

2. 集団精神療法に参加するという体験

集団精神療法の訓練における初学者の集団への関与の仕方は幾つかあろうが、ここでは補助スタッフとして参加する場合を考える。集団精神療法では、すべての関与者が集団の場の一員であると考えることが多いように思え、純粋な観察者として関与する形態よりも、集団の一員として他の関与者である参加者（グループ・メンバー）、スタッフと対人的相互作用を行う存在として関与する場合が多いのではないだろうか。初学者はグループ・メンバーとして関与する場合もあろうが、集団を運営する側として補助スタッフのような形で参加する方が多いのではないかと思う。以下、そのような場合について考える。

このような集団精神療法の状況における初学者は、関与観察 participant observation (Sullivan 1954) を行う者である。集団の場の一員として関与し、集団に臨床心理学的介入を行うことが期待される役割である。しかし集団という場は複雑であり、初学者が介入することは容易ではないと思われる。そういう状況の中、自分よりも上級の臨床家が同じ場に関与し、介入を行っているのだから、上級の臨床家が一つのモデルとなり、上級の臨床家に対する観察学習と模倣が行われる場合が多いだろう。Yalom (1995) は初学者は、スーパーヴィジョンにおいてスーパーヴァイザーから示された介入の仕方をそのまま行って上手くゆかない傾向があるので、その点をあらかじめ伝えておくようにと述べている。同じ集団の場に関与している場合なら、同様のことはさらに起こりやすい可能性があるだろう。

初学者は、上級者が行う集団や参加者への介入を集団の一員として体験し、観察することができる。しかし実際上は、集団精神療法場面で生じている集団力動を理解するには、集団精神療法経験の蓄積とその検討、理論的学習等が必要であり、初学者による観察は、それ自体が訓練の対象となるという意味合いがあるだろう。具体的には、セッション後に上級者をまじえての振り返り、および記録作成の中で行われることになるだろう。集団の場に関与することに伴う多様で複雑な刺激入力は、初学者がそれを意識化、言語化することはかなり困難であろうが、刺激入力自体は、関与の機会を重ねることにより、体験として蓄積されてゆくように思われる。

また、集団精神療法場面において初学者が、前述したように上級者を模倣する形で介入を行うと、そこに上級者が行ったのとは異なる反応、期待とは異なる反応が生じ得る。初学者は通常、上級者とは職場での地位・立場、年齢、性別、そして人として周囲に与える印象、行動上の特徴、人格等が異なっていると思われる。また、言語的側面の模倣はできても、非言語的側面の模倣は困難な場合が多いのではないか。たとえば上級者の問いかけには多くを語ってくれる参加者が、初学者が同じ言葉で問いかけても、乏しい反応しか示さない、といったことが起こるが（渡辺 1990）、これは心理学的介入は音声的コミュニケーションであるという Sullivan (1954) の指摘からすると、初学者には音声的側面の模倣は難しいことを示しているように思

える。心理臨床的介入の模倣には、限界がある。そして、このようにして生じるズレからも、初学者は学んでゆくことになる。

集団精神療法における訓練では、初学者は関与と観察と介入を行う。観察および介入に関しては、上級臨床家を交えて検討が行われる。集団の場に関与することによる刺激入力、その一部が認識されるものと思われる。介入も吟味され、その意図、影響ないしは効果の明確化が行われよう。観察と介入は相互に影響し合う循環的過程である。それまでの刺激入力にもとづいて介入が行われ、それに対する反応は新たな刺激入力となり、次の介入に影響する。この過程の一部が認識され、すなわち観察となるが、それは集団精神療法の場ではなく、事後の検討において行われる部分もあるだろう。

3. 個別面接の陪席

ここにおける初学者は、臨床場面にいる一員として広義の意味で関与はしているが、通常介入は期待されず、観察者という色合いが強い。観察により学習することが期待されている。クライアントや面接担当の臨床家との相互作用は弱いものと思われる。個別面接の対人の場に関与して、クライアント、上級臨床家、両者の相互作用に関する刺激入力を受け、その一部が認識されて観察となる。認識は面接後の検討により促進され、観察内容は豊富化、精緻化され、次の観察に影響を与える。認識と観察内容は一種の仮説であり、面接が重ねられ刺激入力が増大してゆくに従い、更新されてゆく。

4. 陪席面接のスーパーヴィジョンで行われること

陪席者と臨床家が、面接におけるクライアントと臨床家との相互作用の過程を吟味し、陪席者、臨床家双方の認識と観察が照らし合わされて検討される。陪席者は観察者であり、臨床家は関与観察者である。関与観察は、実際上はかなり難しい。心理臨床の場は、クライアントの利益を最大にすることを目標として制御されているべきだろうが、介入をすべて意識化した形で行うことは難しく、臨床家、クライアント双方がそれぞれの刺激入力に対する反応として、明確に意識しないで行っている相互作用の部分はかなり大きいものと思われる。したがって、陪席面接のスーパーヴィジョンは、第一には陪席者の認識と理解に対して行われ、それが的確なものになることを目指すであろうが、一方で、臨床家の認識と理解の明確化、的確化という側面を含み得る。臨床家は陪席者よりも、経験と立場における優位性を持ち、かなり不均衡な力関係があるため、臨床家側の認識と理解に陪席者側のそれらが接近する形での均衡に至りやすい傾向となるだろう。

5. 陪席者がいることが臨床家に与え得る影響

初学者の観察下に、心理学的介入と相互作用が行われる。臨床家側には、失敗はできないという緊張感、良いところを見せたいという願望、介入に伴うリスクを避けようとする慎重さ、クライアントとの強い相互作用を避けようとする傾向、陪席者に対する親的な逆転移感情、等

が起こり得るように思う。

失敗はできないという緊張感は、臨床家が陪席者の指導者であることから生じる面がある。自動車学校の先生が生徒に対して抱く心情に近いかもしれないが、臨床家とクライアントが相互作用を行う心理臨床の場合は、自動車の運転が行われる教習所や公道に比して、はるかに関与する要因の多い複雑な場である。しかも、自動車運転の場と違い、関与する要因には認識の困難なもの、潜在的なものが多い。自動車の運転は基本的に、明確なルールに基づいて行われようが、心理臨床の場における介入と相互作用には明確なルールと呼べるものは少なく、理論や定石による仮説に基づいて行われる。こういった性質が、陪席者を前にした面接において、臨床家が慎重になり、失敗を回避し、リスクのある介入を避ける傾向を生むように思える。初学者にとって上級の臨床家はモデルとなることが多いと思われ、同一化の対象となるような良いモデルになることが望ましいとすると、複雑な要因の関与する臨床場面での振る舞いは、リスク回避的なものになりやすいだろう。強い相互作用を避ける傾向は、強い相互作用自体がそもそも二者的なものであるかもしれない（たとえば愛着関係の発達の起源は二者的なものであろう）、その陪席者に対する影響を懸念するという親的な逆転移が関わっているかもしれない。良いところを見せたいという感情は、自己愛的な動機が関係しているように思う。陪席者のいる面接において、臨床家は全体的には慎重でリスク回避的、保守的になる傾向があるのではないだろうか。陪席者が何らかの理由で不参加の場合の面接に、私はどこか解放感のようなものが自分の中に生じるのを感じるのだが、これは他の臨床家ではどうなのだろうか。初学者はストレスラーであるという側面があるように思う。

陪席者に対するスーパーヴィジョンは、臨床家の認識と理解をも促進させ、面接にプラスの影響を与え得る。臨床家側の認識と理解を明確化させる働きもあるだろう。一人で面接記録を書く以上の詳細な検討が行われることになるのではないかな。単純に、面接について話す相手がいるということ自体のプラスの影響もあり得よう。

6. 個別面接の陪席者がクライアントに与え得る影響

クライアントの陪席者に対する反応は幾つかあるように思える。ほとんど視線を向けず反応を示さないように見える場合もあれば、面接の前後、あるいは面接中に語りかけるクライアントもいる。陪席者の存在がクライアントに与え得る影響としては、ある種の緊張感、自己開示へのためらい、初学者の役に立ちたいという思い、ある種の保護的態度、自身の子どもに対する感情の投影、自身に対する不甲斐ないという思いの増強、などがあり得るように思う。

ある種の緊張感は、陪席がクライアントの同意のもとに行われるとはいえ、避け難いように思える。陪席者は個別面接の場で相互作用をほとんど行わず、心理専門職を目指して学んでいるという以上の情報は、あまり開示されないのではないかな。臨床家が陪席者の影響を、最小限にしたいと考えることが多いということも関係していよう。クライアントの陪席者に対する認識は、ほぼ陪席者が臨床家の承認のもとで関与しているという点のみに基づくように思える。そのためクライアントには、よくわからない人の前で自己開示を行うと感じられる可能性がある。集団精神療法訓練で、数十人以上の大グループに参加して自己開示を行う場合に通じる感覚があるかもしれない。自己開示は、自身のつらい、苦しい、悲しい等の感情が伴う事柄に関

して行われる場合が多いと思われ、それが自身の弱みを開示すると感じられる場合、ためらいが生じ得るだろう。自身を弱い存在と感じ、不甲斐なく思うというのは、人がクライアントの立場になった場合にはある程度共通していようが、それらの感覚には他者からの否定的な態度や社会規範の取入れである側面があり、実際に他者が目の前に存在することで増強される場合があるのではないか。ある種の保護的態度、自身の子どもに対する感情の投影は、親的な態度とも考えられ、実際、陪席者とクライアントとの年齢差が親子類似である場合に起こりやすいように思える。初学者の役に立ちたいという思いは、クライアントが臨床家に対して抱く感情の延長という面があるのではないか。クライアントは自身に益する支援を行う臨床家に対して、それに報いたいという感情を持つ場合がある。クライアントは料金を支払い、臨床家はそれに対して支援を行うという形にはなるが、心理学的支援の源泉が宗教的なものであることを考えても（Ellenberger 1970）、心理的にそのようにして割り切れるかどうかは疑問である。クライアントが時に臨床家に向ける感謝の念は相当に強いものであり、クライアントが事例研究を承諾する一つの心理的な理由になっているように思える。初学者の役に立ちたいという思いの背景には、こういった心情があり得る。

7. 面接場面における刺激入力が蓄積されてゆくことの影響

心理臨床の場は、言語以外に、声（言語の音声的側面）、仕草、表情、視線、服飾等の非言語的な要因に満ちており、微細なものを含むそれらが総合的に知覚されて「雰囲気的なもの」となるように思う。心理的な問題を抱えるクライアントに対する心理学的な支援を、クライアントの利益を最大にすることを目指して行われる臨床の場には、特有の雰囲気があるように思える。多くの要因に関わる刺激入力はいずれにも認識することができなくとも、陪席者あるいは初学者の中に蓄積されてゆき、その後の心理臨床活動における参照枠を形作ってゆくのではないか。教えを受け、モデルとなった上級の臨床家に、語彙、口調、仕草などが、時に本人も気づかないうちに似てくるという現象はわりとよく見られるように思うが、それはこの参照枠の影響によるものではないだろうか。

8. 初学者が面接の陪席から学ぶ特異的なもの

初学者の心理臨床に関する訓練の中で、面接の陪席に最も特異的なものは、心理臨床の場における刺激入力の蓄積による参照枠の形成であると思われる。この参照枠には内在化された感覚的なものという面があり、その後の訓練の内的な道しるべのようにして陰に陽に作用するのではないだろうか。

心理臨床に関する理論の学習、事例論文の検討には多様で複雑な刺激入力は存在せず、ロールプレイングも多くは初学者同士で行われ、熟練者とクライアントによる心理臨床場面におけるものとは、刺激入力の性質と量が異なる。心理学的介入も行う集団精神療法への補助スタッフとしての参加、および精神分析における教育分析のように自分自身が心理学的支援を受ける体験には、陪席面接に通じる面があり、同様の複雑な刺激入力の蓄積が生じるであろう。集団精神療法への参加については本論で若干の検討を行ったが、さらに考察することが必要である

う。教育分析的体験に関しては、別途検討が必要である。

心理面接への陪席の指導においては、面接で生じていることや臨床家の介入の意味合いや影響についての検討のような内容が主になるように思われるが、これらは陪席による学習の言わば明示的側面であり、刺激入力の蓄積による参照枠の形成は暗在的側面であろう。とくに意図的な指導の対象にはしづらいように思えるが、その意味合いはより重視されてしかるべきである。陪席から体感的に学ぶことが重要であるという指摘（川端他 2022）も、このことを示しているのではないだろうか。

引用参考文献

- Ellenberger H.F. (1970) : The Discovery of the Unconscious — The History and Evolution of Dynamic Psychiatry. Basic Books Inc., NewYork. 木村敏・中井久夫（監訳）1980 無意識の発見—上下、弘文堂.
- 川端順子・橋本貴裕（2022）：心理臨床センターにおける大学院生による陪席実習の実践報告と課題 帝京大学 心理学紀要26, 53-67
- Sullivan H.S. (1954) : The Psychiatric Interview. W. W. Norton & Company., NewYork. 中井久夫・秋山剛・野口昌也・松川周悟・宮崎隆吉・山口直彦（訳）（1986）：精神医学的面接みすず書房
- Yalom, I.D. (1995) : The Theory and Practice of Group Psychotherapy, 4th Edition. Basic Books. 中久喜雅文・川室優監訳（2012）：グループサイコセラピー 理論と実践. 西村書店
- 渡辺誠（1990）：集団心理療法治療者における自己形成の初期過程 小樽女子短期大学研究紀要 19, 295-322

Abstract

The implications of the experience of attending in on a psycho-clinical interview conducted for beginner students of clinical psychology were examined, including comparisons and contrasts with participation in group psychotherapy. Both positive and negative effects of attending presence on both clients and psychotherapists were also discussed. A characteristic of learning by attending is the formation of a frame of reference through the accumulation of total stimulus input (perceived as “atmospheric”) in the psychotherapeutic setting with the goal of maximizing the client’s benefit, which is an implicit aspect of learning by attending.